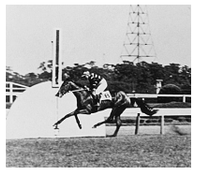
ムカシの競馬を読む



須田鷹雄（すだ たかお）
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第106回 10年・20年・30年前の3月

いまから10年前、平成16年の3月は大事件もなく、振り返ってみれば中央競馬としては平穏な月だった。

レースとしてはサニングデールの勝った高松宮記念がこの月に行われているのだが、兵庫から中央に転じた赤木高太郎騎手がG1初騎乗（モンパルナス・17着）したのがこのレースである。ただ同時に中央入りした小牧太騎手などはもっと前から中央G1に乗っていたし、ニュースと呼べるほどの話題にはならなかった。

そんな月なので、まずはヒマネタから。他クラブの馬の話で恐縮だが、3月14日付のスポニチから引用しよう。

「また増えた！ ジャンボ君が歴史を塗り替えた。13日の中山4Rに出走したシルクオーディンは前走から6キロ増えた622キロで登場。過去のJRA最高体重出走（ビッグサプライズ620キロ＝98年3月7日中京）を上回る新記録を打ち立てた（後略）」

シルクオーディンの記録は長いこと破られず、一昨年になってクリーンが628キロ、630キロと立て続けに更新した。最近は超大型馬の脚元をもたせる技術が進み、現役馬のショーグンは614キロで1着、624キロで3着している。いずれも中央の優勝、馬券対象の最高馬体重記録だ。

ちなみにグリーンファーム所属馬はどうかというと、ベストウィッシュの580キロが出走馬では最高、優勝馬ではグリーンアラモードの568キロが最高である。

10年前の海外ではこんな出来事が。3月4日付の夕刊フジより。

「2日、米カリフォルニアのトレーニングセールとして有名なバレッツ・マーチセールで、多数の活躍馬を世界に送り出してきたサラブレッド・コーポレーションのディスパーザルセール（すべての所有馬を売却すること）が行われた」

このディスパーザルセールはサラブレッド・コーポレーションの総帥だったサウジアラビアのアーメド・サルマン殿下が心臓発作で死去しチームが解散することになったためのもので、私もちょうどバレッツで「観戦」していた。記事ではG2勝ち馬キャットファイターが130万ドルで売却されたことを伝えていたが、安いほうはというとフェアイナフというダイイシス産駒で1200ドル。ただこの馬はその後下級条件ばかりとはいえ7勝をあげ5万ドル以上を稼いでいる。

日本ではこの種のディスパーザルセールはほとんど行われずにきたが、一昨年のJS繁殖牝馬セールにエクセルマネジメントの所属馬が上場され、日本ではおそらくはじめてのケースとなった。

続いて20年前、平成6年の3月。この月は日本の騎手制度が大きく動いた。3月15日付のスポニチから引用しよう。

「英国の名手アラン・ムンロ騎手が、9月の中山競馬から3か月間日本で騎乗することになった（中略）騎乗免許を受けるための条件となる身元引受人（調教師、馬主）が見つかり、すでに申請書類もJRAに提出済み。免許が交付になるのは確実で、希望通り9月からの騎乗が可能となる（後略）」

騎乗が始まったという話ではなく書類を出したという話だが、今につながる外国人騎手のスタートである。本連載の初期に、実は昭和50年代にも外国人騎手がいたという話を御紹介したことがあるが、当時は制度化されたものではなかった。

記事は「外国人騎手第1号」という見出しがつけられているが、最終的に第1号としての騎乗を果たしたのはニュージーランドの女性騎手、リサ・クロップ。6月25日の中京開催から騎乗をはじめ、7月16日の小倉で初勝利をあげた。翌年も来日したクロップは、日本で通算189戦16勝の成績をあげている。

ムンロは記事にある通り秋の中山から騎乗。初騎乗でいきなり勝利をあげ、最終的に日本で25勝を記録した。ムンロはその後香港に拠点を移し「文羅」の広東語名で活躍、現在はシンガポールでリーディング上位に名を連ねている。

続いて平成6年3月24日付の日刊スポーツから、

「女優南田洋子の名前をつけた競馬のレースがニュージーランドで行われた。今年で結婚33周年を迎えた夫の俳優長門裕之が、妻の南田のために、19日にニュージーランドのオークランドレーシングクラブで開催された重賞レースを約100万円で買い、『YOKO MINAMIDA CUP』と命名、プレゼントした。競馬好きで鳴る南田だけに、これには大感激だった」

南田さんはダイナアクトレスの一口馬主としても有名だったが、長門さんは競馬に詳しかったわけではなかったとのこと。スタッフと相談して協賛レースを組んだそうだ。いまでは日本でもポピュラーな協賛レースだが、団体を対象とするものは平成11年に高崎で、個人協賛競走は平成13年に上山ではじまったものなので、この当時は貴重なプレゼントだった。

最後に30年前の昭和59年3月から、まずは3月29日付の大阪スポーツから引用しよう。

「小説もどきのミステリアスな話が、このほど小倉開催で起こった。先週の九州産4歳特別に出走を予定していたK号（原文では馬名明記）がそれで、どこからともなく『あれは九州産ではない』のうわさ話が流れている。下馬評では大本命馬、それが出生の秘密を問題にされたわけだから、関係者はあわてた。結果はオーナーが『出走させず』の断で自重となり、今週のくすのき賞に軌道修正された。しかし、この問題は今後に尾をひきそう」

この馬は母が北海道で種付けされ九州で生まれた、いわゆる「九州産の持ち込み」なのだが、そもそも北海道生まれの北海道育ちで、登録上の不正があるのではという噂が出たらしい。

真相は定かでないが、この馬は記事中にある転身先のくすのき賞に勝ち、後には中央重賞でも3着している。馬のレベルが高すぎたことが疑念を生んだのかもしれない。

馬本人（？）はたいへんな頑張り屋で、中央に居づらくなったか3歳時に抹消された後、紀三井寺→高知と転じて10歳まで走った。当時の表記で11歳、いまの高知では普通だが当時はさすがに少数派だ。この高知では重賞3着も記録している。

最後に、これは競馬のニュースではないのだが「競馬場に関係がある」「競馬ファンと鉄道ファンはけっこう重なっている」という観点から収録をお許しいただきたい。3月1日の朝日新聞関西版から。

「阪急電鉄と阪神電鉄は29日、大阪神戸間の輸送力増強を目指した3月25日からのダイヤ変更を発表した。このダイヤ変更に併せ、阪急電鉄では神戸本線と交差する今津線を西宮北口で分断、全国でたた一つ残っていた二路線平面交差（ダイヤモンド・クロス）が姿を消す」

ダイヤモンドクロッシングは2路線の線路が交差点のように交わるもので、当然ながらそこがボトルネックとなって通行量が制約される。神戸本線の運航頻度と速度を確保するために今津線が分断されたということだろう。

これをもって阪神競馬場のある仁川駅から阪神国道駅、今津駅への直通はできなくなった。記事には誤りがありダイヤモンドクロッシングは名鉄などに残っていたのだが、大規模なものは西宮北口が最後。「競馬ファンで鉄道ファン」という人はこの3月に乗り納めをしたことだろう。

ムカシの競馬を読む

平成16年・中京競馬場
高松宮記念
優勝馬：サニングデール

© JRA